第 73 期 会長就任のごあいさつ

—創造性豊かな学会活動—

田 中 實 [新日本製鐵(株)代表取締役副社長]
Minoru TANAKA

このたび会員の皆様のご推挙により、第 73 期会長に就任することになりました。

新しい副会長、理事、評議員、各支部長の方々と共に、また事務局のみなさんと共に、重責を全うすべく精一杯やりたいと思っております。会員の皆様のご協力、ご支援をお願い致します。

まずは 1 月 17 日の阪神大震災の災禍に会われた会員会社、会員の皆様にお悔やみ、お見舞申し上げます。

さて本年に入ってから日本経済は、引き続くバブル後遺症、一段の円高等、その環境は誠に厳しく、問題山積の状況にあります。特に分不相応の円高は、我が国を支えて来た典型的な優良企業、中小企業を直撃しているところであります。国民生活全般に多大の影響を及ぼすことでしょう。

この難局を乗り切るには最早や月並な言葉となってしまった“リストラ”はいうに及ばず、格段の技術革新に期待しなければならないと思います。

平成 6 年科学技術白書の中に研究費の項があります。

購買力平価換算で日本 14 兆円、アメリカ 30 兆円、ドイツ 7 兆円。

研究費の政府による負担割合は国防研究のウェイト等の差異があり単純に比較できませんが、アメリカ 42%、ドイツ 37% に対し日本は 19% と低位で民間依存型、と記されています。

一方民間各企業は研究部門も聖域とせず合理化を進めておりますが、我が国の科学技術の将来について会員の皆様にも考えていただきたいことです。

本学会も会員数 45 000 人を擁し、かつ会費収入が全収入の 40% という事業マインド溢れた実力を有するに至っております。ここまでもって来られた多くの諸先輩に心からの敬意を表する次第です。

伝統ある本学会も 1997 年には 100 周年を迎えます。

1994 年 4 月に設立された「創立 100 周年記念事業委員会」〔委員長 相川賢太郎三菱重工業(株)社長〕が活動中であり、この記念事業を成功させるために会員の皆様の絶大なご協力、ご支援をお願いする次第です。

また、ここで第一世紀を締めくくり、第二世紀への幕開けにふさわしい学会の姿を考えるために、土屋喜一先生を委員長として、「第二世紀将来構想委員会」も活動中でありその成果を期待されているところであります。

たいへん僭越ですが、私は今期、以下のことに留意して、副会長、理事のみなさんと共に会を運営してまいりたいと考えます。

1. 創造性豊かな学会活動を

明治の開国以来の日本の産業、技術の歴史は述べるまでもない。今や生産技術の面では世界一流である。しかし、ソフト面で評価するとすれば技術輸出貿易は高々約 4 000 億円であり、アメリカの約 2 兆円の 4 分の 1 に過ぎない。発明、発見等我々の技術に独

創性を求めたい。無資源国日本に必要なものはソフト・ハードに亘る知的財産の創造である。

2. 産学協同の実を具体的に挙げること

本会は部門活動が活発である。会員構成は、産業界 70%, 学界 30% であるが大学の活動を弱体化させてはならないし、また産業界はリストラの中、一層大学との連携を密にして中長期的に成果を挙げたい。特にその活動は専門分野の壁を破り横のひろがりをも求めたい。

隣を知ってこそその専門馬鹿である。

若い会員の方々はあらゆることに深い興味をもつことが自己の能力向上につながると思う。

3. 支部活動の格段の強化を期待

本会の支部構成は 8 支部であるが、ここは会員活動の拠点である。

産業界、大学との良いバランスを保ち学生会員等も含めて自由な伸び伸びした発想で発展させていただきたい。

4. 理工学離れでなく理工学の復権を

これは、学協会における永遠の議題である。

理工学離れの現実を直視し、技術者・研究者の処遇、環境を含め具体的な対策を企画して実行に移す努力こそ必要。

産学協同の実を挙げるのが理工学離れを防ぐことにつながると認識しているが、大切なことは中・高校時代にはぐくまれる理工学に対する魅力である。

さらに事務局への期待について述べたいと思います。事務局は学会スタッフとして有能な集団であることを誇りに思っておりますが、会員サービスの充実、業務の効率化について自主的に活発な活動をされるよう希望しております。5月21日に信濃町煉瓦館への移転はその好機であり、100周年に合わせて新しい試みをしたいものです。

私共理事一同も、一致協力して本学会の円滑な運営に努力する所存ですが、どうか会員の皆様も各人が本学会に何を為す事が出来るかを考え、参画いただいて、みんなの学会として盛り立てて下さい。これこそが本学会発展の基礎であります。本学会の諸行事は多種多彩ですが、若い会員の方々もそういう場に積極的に参加され諸先輩と交流を深められることは極めて意義のあることです。

最後に前期の平田 賢会長はじめ副会長・理事・評議員の方々、また各部会、各部門、各支部で献心身的に学会活動を推進して下さい多くの会員の皆様に心からの敬意を表し、引き続き私共への変わらぬご支援をお願いして、会長就任のご挨拶といたします。

(1995年4月1日 通常総会あいさつ文より)